

伊藤創

要旨

本研究では、日英語を母語とする幼児を対象に〈一方から他方への働きかけがなされる〉画像について描写実験を行い、動作主に焦点をあてる描写 (AF) と、動作の受け手に焦点をあてる描写 (PF) の出現傾向を比較した。また描写に用いられた動詞の自他・活用形を分類し、各年齢における出現割合も比較した。その結果、英語母語の幼児は、日本語母語の幼児と比較して AF で事態を描く傾向が強く、また日本語母語の幼児は 3 歳児の時点で、一定数の受身表現の使用も見られた。このことから焦点の当てる参与者の選択 (事態把握)、および受身表現による事態描写の型もこの年齢で (個人差はあるにしても) 獲得されていることも示唆された。

一方で、いくつかの画像では日本語母語の幼児であっても、3 歳児においては AF での描写をする幼児が一定数おり、それが年齢とともに減少すること、また Animacy の低い Agent には、英語母語の成人・幼児とも PF で描く傾向が強いことから、言語普遍的には Agent に際立ちを感じ、そこに焦点を当てて描く傾向があること、そこから各言語を母語とする成人の描写の型が徐々に獲得されていくことも併せて示された。

1 はじめに

ある事態をどのように捉え、描くかという事態描写・把握の「型」は言語によって異なることが古くから指摘されるが (Whorf1956, Slobin1987, 国広 1974, 池上 1981, Hinds・西光 1986 など多数)、伊藤 (2015)、伊藤・王 (2016)、伊藤 (2018) の一連の研究では、特に〈一方から他方への働きかけがなされる事態〉に焦点をあて、同事態に対する日英語母語話者の把握・描写の型の比較調査を行っている。これら調査では、様々な働きかけ (鮫が人を襲う、上司が部下を叱る etc.) を示す画像について、被験者に描写させているが、そのほとんどにおいて、英語母語話者は動作主 (Agent) に焦点をあて描く (Agent Focus, 以降「AF」) の傾向が日本語母語話者に比べて強い (日本語母語話者は、動作の受け手 (Patient) に焦点をあてて描く (Patient Focus, 以降「PF」) の傾向が英語母語話者に比べて強い) ことが示されている。

2 調査内容

本研究では、こうした事態把握・描写の型の獲得時期を明らかにするために、英語を母語とする幼児 (以降「E 幼児」) (3 歳児 32 名、4 歳児 30 名、5 歳児 24 名)、日本語を母語とする幼児 (以降「J 幼児」) (3 歳児 50 名、4 歳児 50 名、5 歳児 50 名) を対象に、伊藤・王 (2016)、伊藤 (2018) と同様の画像描写実験を行い、AF と PF の描写の出現傾向について分析を行った。具体的には、以下の図 1 のような画像を提示し、そこに描かれた事態について自由に描写してもらい、それらの描写を、AF (図 1 に

* 本研究は、ICIS2020 (International Congress of Infant Studies)(2020.7/8)、JCIS (日本認知科学会第 37 回大会 (2020.9/17)) において 3 歳児、4 歳児を対象とした調査結果について行った発表に、5 歳児データを加え、上記学会で頂いたご助言にも鑑み、新たに分析・考察を加えたものである。

おいては、動作の働きかけ手である「サメ」を主語として描いたもの)とPF(図1においては、動作の受け手である「ヒト」を主語として据えたもの)に分類をし、それらの出現割合を比較した。まず、以下に成人、および3歳児、4歳児、5歳児によるAFとPFの描写の例を示す。

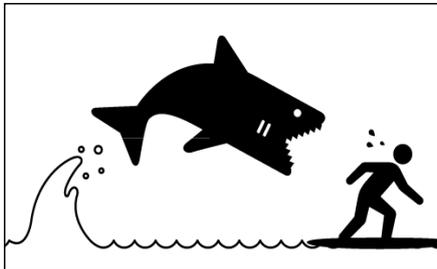


図1

【Agent Focus の描写】

- (1) a. サメが海から出てきて人を襲おうとしている。(成人)
b. A shark leaps out of the water to attack a surfer. (成人)
- (2) a. サメが人間を食べようとしてる。(5歳児)
b. The sharks want to eat the poor swimmer. (5歳児)
- (3) a. サメが海から飛び跳ねてる。(4歳児)
b. A shark jumping in, trying to eat a person. (4歳児)
- (4) a. サメが人のこと食べるみたい。(3歳児)
b. A shark is... It is eating – trying to eat that people. (3歳児)

【Patient Focus の描写】

- (5) a. 男性がサメに食べられそうです。(成人)
b. A surfer is trying to escape from being attacked by a shark. (成人)
- (6) a. サメに食べられそうになってる。(5歳児)
b. Uh – running away from a shark trying to bite you. (5歳児)
- (7) a. サメに食べられてる。(4歳児)
b. A man was running himself away from a shark. (4歳児)
- (8) a. 食べられる。サメに食べられる。(3歳児)
b. Him. being eaten by shark. (3歳児)

3 調査結果

3.1 AFとPFの出現割合

上記の描写の英語母語話者、日本語母語話者における年齢ごとの出現割合を、図2および図3に示す(数値は実際に得られた描写数)。

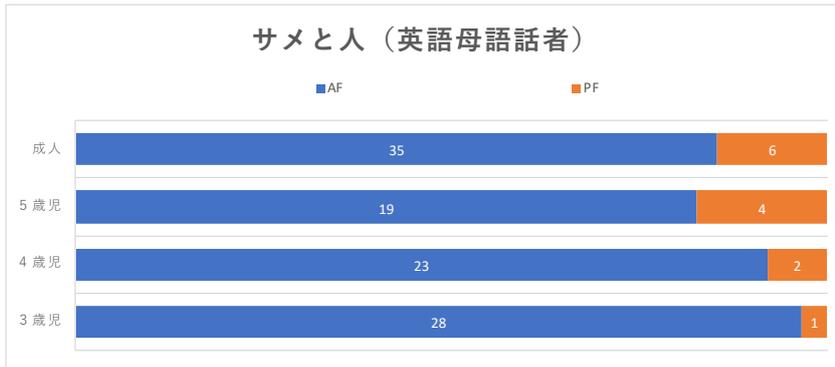


図 2

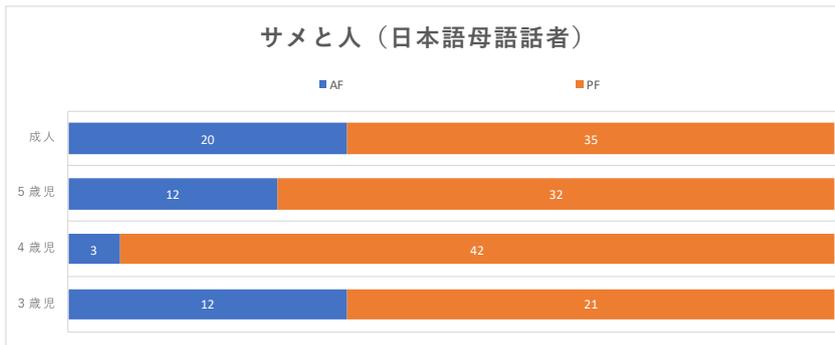


図 3

図から明らかなように、英語母語話者は、3歳児から5歳児まで成人と同様、AFの描写がその大半を占め、それとは対照的に日本語母語者はPFの描写が多い。幼児全体で日英語母語話者を比較すると下記のようになり、両者は統計的にも有意な違いが見られた ($\chi^2(1) = 55.762, p < 0.1$)。

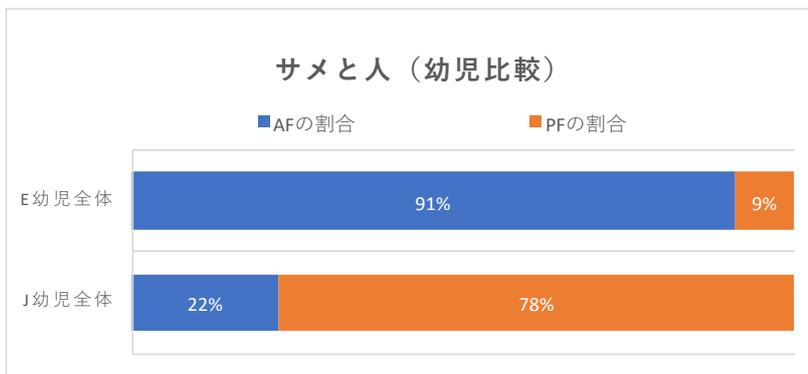


図 4

今回の調査では、伊藤 (2018) で用いられた画像のうち幼児への提示が不適切と考えられる画像 2 枚¹を除いた 10 枚で調査を行ったが、その 10 枚のうち、9 枚で上記と同じように、E 幼児は AF で描く傾向が J 幼児よりも強い (J 幼児は PF で事態を描く傾向が E 幼児よりも強い) という結果が得られた。

¹ 今回調査から覗いたのは、警官が銃を構えて人を逮捕しようとしている画像と、一方の侍がもう一方の侍を刀で切り付けている画像である。

3.2 受身形の使用

さらに本調査では、描写に用いられた動詞の自他・受身表現の有無について各年齢における使用頻度を明らかにした。図1についての描写についての結果を図5、図6に示す。

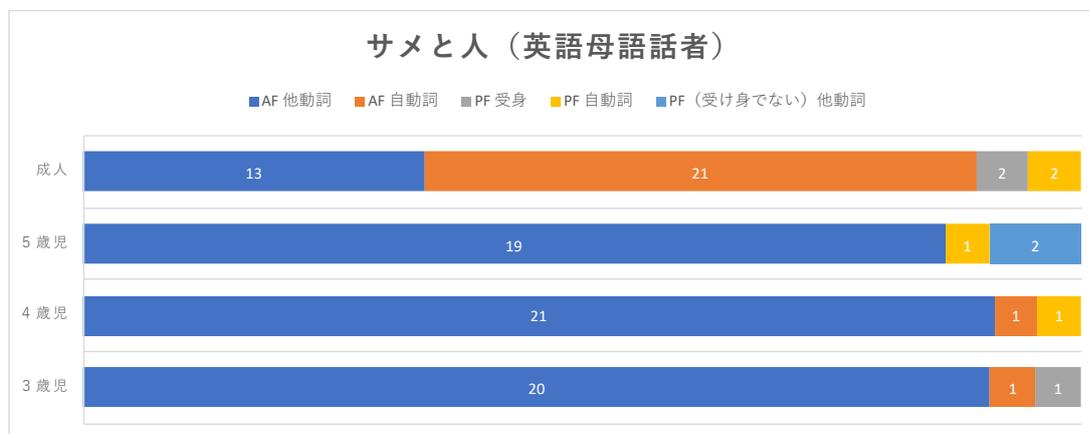


図5

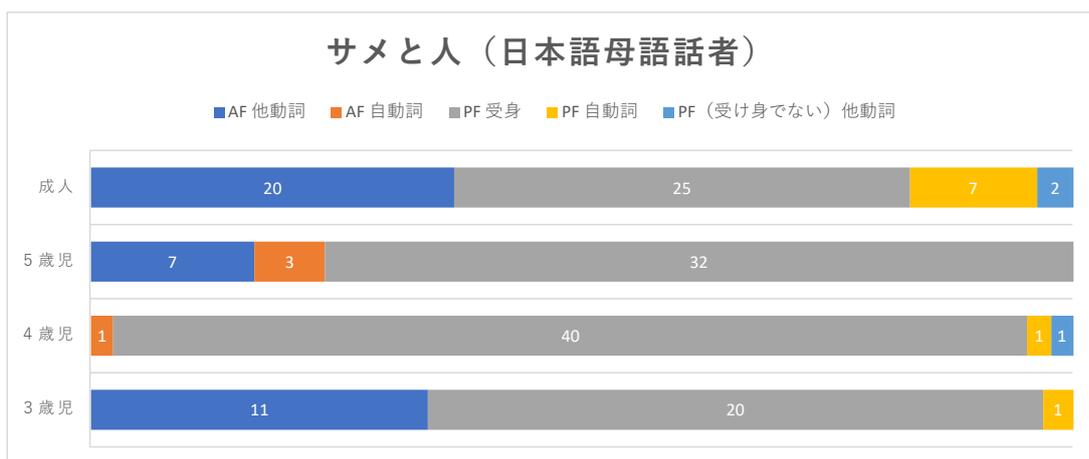


図6

英語母語話者は、PFの描写が少なく、必然的に受身表現の使用数少ない。一方で、日本語母語話者は、成人、幼児ともにPFでの描写が多く、幼児の描写においても、3歳児から（その形態的な複雑性にも関わらず）受身形を用いた描写が見られる（それぞれ、日英語母語話者の成人同士、またJ幼児全体・E幼児全体の受身使用を比較した図が下記である（それぞれ統計的に有意な違いがある）。この比較においては、そもそも日本語母語話者において、PFの用例数が多いこと踏まえて、PFの描写のみを抜き出し、それらの中での受身使用の数を比較したものであるが、PFの描写のみに限ってその割合を比較しても、やはり日本語母語話者は、英語母語話者に比べて、幼児、成人ともに受身の使用が多い。

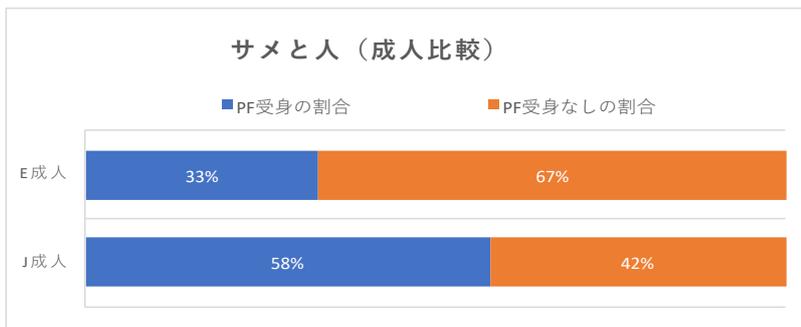


図7 ($\chi^2(1) = 3.551, p < 0.1$)

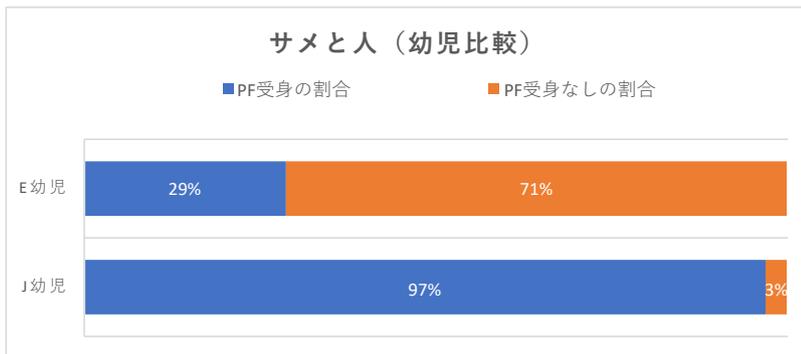


図8 ($\chi^2(1) = 42.040, p < 0.1$)

この受身使用の傾向についても、本調査で用いた画像10枚のうち、8枚が上記と同じく、J幼児がE幼児に比べてより高頻度で受身表現を産出することがわかった。また受け身を多用するJ幼児であるが、(図1については、3歳の時点ですでに一定数みられるが)特に4歳、5歳からその使用が急激に増加する。一方、E幼児の描写では受け身形の使用は非常に限定的であり、5歳児になってもほとんどその使用は見られない。

4 おわりに

以上、本調査では、E幼児はJ幼児に比べてAFで描写を行う傾向が強く、またJ幼児はPFの描写において受け身表現を用いた描写を行う傾向が強く、成人の日英語母語話者におけるそれぞれの描写の型を3歳児の時点ですでに獲得していることが強く示唆された。またJ幼児はすでに3歳児の時点で、一定数の受身表現の使用も見られることから、受身表現による事態描写の型もこの年齢で(個人差はあるが)獲得されていることも示唆された。

また、3歳児から5歳児までの幼児全体では、こうしたことが言える一方で、画像ごとに、また年齢ごとに詳細にみていくと、いくつかの画像ではJ幼児であっても、3歳児においてはAFでの描写をする幼児が一定数おり、このことから、言語普遍的にはAgentに際立ちを感じ、そこに焦点を当てて描く傾向があり、そこから各言語に特有の事態描写の型を獲得し、徐々にそちらに(J幼児の場合であれば、PFでの描写へ)移行していくことも示唆されたように思われる。

また、英語母語話者の描写の一つの特徴として、Animacyの低いAgentからの働きかけがなされる事

態（強風が傘を吹き飛ばす、津波が人を襲う etc.）については、いわゆる無生物主語文を日本母語話者よりも多用する（あるいは、そもそも日本語では自然な表現として成立しない無生物主語文が英語では自然な表現として用いられる）ことが指摘されてきたが、本調査では、強風、津波が働きかけ手となる事態については、成人、および幼児にいずれにおいても英語母語話者の描写でも AF は少なく、多くが PF の描写であった。この点についても Animacy の低い Agent には、AF での描写傾向が強い英語母語話者であっても、（すなわち言語普遍的に）際立ちを感じにくいことが示された。

参考文献

- 池上嘉彦（1981）『「する」と「なる」の言語学：言語と文化のタイポロジーへの試論』東京：大修館書店。
- 伊藤創（2015）「言語間における事態の描き方の相違についての一考察」『関西国際大学紀要』16:1-12
- 伊藤創・王蓓淳（2016）「日本語・中国語・英語における事態把握の「型」と事態描写の「型」の関連性」『政大日本研究』13:21-47.
- 伊藤創（2018）「日英語母語話者における事態の描き方の型の違いと事態の捉え方の型の違い」『言語研究』154:153-175.
- 国広哲弥（1974）「人間中心と状況中心：日英語表現構造の比較」『英語青年』119（11）:48-50.
- Hinds, John・西光義弘（1986）『Situation and person focus：日本語らしさと英語らしさ』東京：くろしお出版
- Slobin, Dan I. (1987) Thinking for Speaking. *Proceedings of the Thirteenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*:435-445.
- Whorf, B. L. (1956) *Language, thought, and reality: selected writings*. Technology Press of Massachusetts Institute of Technology.